第五日。行程十里、計四十二里半强。旅費一圓二十一錢。內譯、宿七十五錢、切手十五錢、ミルクと玉子十七錢、下駄十四錢。

碓氷を越えて

峠の朝は露が重かつた。

雨戸を繰ると白い霧が流れる。碓氷の露は深い。安藤法學士と源泉に顏を洗ひに行く。碓氷川の源である。十一年行幸の折の御料となつた曰く付のものである。樅の大木の根本から、滾々として湧く。水面から細い霧が飛び立つ。

紀州熊野の靈木の葉がヒラヒラと空高く飛び上つた。アレヨアレヨと見てゐる中、東をさして吹き渡る。人は奇異の眼を見はつた。五彩の雲が東にかゝると、その葉は落ちた。こゝは信濃と上野との國境、忽ち興る朱欄金壁、俄に賽者の陸續、いつの間にか、山は常に雲霧鬱として靈驗著しい熊野神社となつた。玉垣、鳥居、舞殿も樓門も兩國の人から半分づゝ異つた形に建てられ、高麗狗も此社では向ひあつてゐない。長野縣、群馬縣の制札も二ツ並んでゐる。臼のやうな唯氷の風車が二ツ。

碓氷峠の風車、あの風車

誰を待つやら、くるくると

「オイ、此が廻るだらうか。」と土田法學士。朝起君（神主の息）石段から顧せば廻らあ。こゝの峠町は皆神主ばかり、それで小供の遊も二人が笛と大皷とを、一人が面を被つてヒユー、ヒユー、ドンドン。門前の雀蒙求を誦んず。天狗の舞の足つきの巧いこと、祝詞などは朝飯前のこと。

輕井澤へ、土田、安藤の兩法學士に送られて碓氷を下る。あゝ、輕井澤、輕井澤、全く歐化せんとする輕井澤。その山、その野、その森、川、點々と青葉隱れに別莊が散在するさま、白衣洋裝の人が行く、蝶のやうに身輕く飛ぶ金髮の小供。町を歩いても西洋臭い。一寸魚屋の看板も Fresen Fish, salt Fish or Japan Fiches. 離れ山の傾斜に青草をはむ羊の群、落葉松の間を縫ふ人、野には龍膽の花が多い。一度行つて見たい南歐や、瑞西の面影が、こゝで偲ばれるや否。

追分節で有名な追分には沓掛を過ぎてから、雨はやんだ、輕井澤の野が青い。道は分れて左は諏訪へ。今一度と碓氷の方をふりかへる時、浴衣がけの人が來て、「君が石原君で。……」氏は醫科大學生、心持ちに僕の通るのを待つてゐたと。僕は幸、この宮原虎、清水廣政の兩氏の好意によつて有名な追分節を馬子の七五三次君から聞くことを得た。七五三次君は一杯のビールに赤くなつて、茶碗四つを手玉に取り、ボコ、ボコ、ボコと馬の足搔にして、

淺間山エェさんなぜ燒エェエしやんす、裾にお十七（モシ）エエエェもちながら。ア、キタソデ戸がなる出て見りや風だに。

七五三次君大分馬の脚音が亂れた。ボコ、ボコ、バタ、バタ。

淺間山からエ鬼やけつウ出してエェエ鎌でかつきるよなア、エェエ屁をたれたア。ホオサドンドン、エエエョオカ。

ワハ、、と七五三次君。とう〳〵倒れるやうに笑つた。玉山將に崩れんとするところである。今一人、僅に昔の節を傳へるは扇屋の媼さん。今年七十餘、昔は驪女郎。今のうちに聞かねば永久に節は忘れられる。殘念だが時が無い。

こゝには二百五十年以來の宿帳が殘つてゐる。飯盛奉公人、羅女郎のことは言ふに行數が許さぬ。兩氏が開いて見せられた、せめて其の宿帳だけ。（下諏訪、桔梗屋で、三十一日夜十時記。）

寶曆十二年（追分町土屋市左衛門）午三月十六日御宿　銀二枚一匁
西本願寺樣江戸より京都に。御供人馬人足八百一人、以下略
献上　玉子箱、餅、山いも
十六日夕献立
皿。大根、にんじん
平盛。油あげ、牛蒡、かんぴやう
ちよく。せり、ふき
ひたしもの。同
十七日朝
皿。だいこん、にんじん

平盛。八杯とうふ、くずたまり
ちょく。こんぶ、しらあひ

寶暦九年五月四日御宿
一紀州載姫君樣御上京
献上　三寶？　たひ二枚、ふき
十五日の献立
鱠。大こん、うど、鯛、せうが
くり汁。すり大根、とうふ
御飯。鮨鹽引、平盛、いたかつを
平盛。兼玉子、蕨、椎たけ、かんぴやう
猪子。うど、しらあへ
香物。かす漬大根

第六日。行程十里弱（峠町望月間）、計五十二里。旅費一圓六錢。内譯、繪葉書三十六錢、切手三十錢、電報四十錢（二通）、宿賃無。

諏訪へ

（象　盛）

足引の山路遠くやいでつらん
日高く見ゆる望月の駒

望月は古來「望月牧は御牧隨一にして、」と言はれてゐる。現に三井村には長野種馬所がある。カラン、カランと高い寛を渡る雨滴の音がする。伽藍のやうな廣い部屋には蚊帳が微かに搖れてゐる。内田屋は昔中山道の往さ來るさの盛を偲ばせる、大きな造り方の家である。寢殿風の古雅な部屋に宿つた。

翌朝、諏訪へ、旅裝甲斐がひしく立つ。鐵道が出來てから、街道を草鞋でヨチヨチ行く人は無い。昔を偲ばせる宿驛は、今は人煙稀に、大方蕭條たる部落となり、僅に亂山群嶺の間で忘れら

れた如くに、山に倚り、溪に集り、川を圍んで殘つてゐる。今日は是非諏訪まで。これには理由がある。

笠取峠を越えると平地らしい平地は無い。群山環立し、綠山綠水の間に點々として山村水廓を見る許り、青葉に靡く人煙、誠に淋しい感がする。山のたゞずまひ、谷川の流、笠傾けて急ぐ旅人の姿も似つかはしく、旅と言ふ感が殊に深い。和田では養蠶で忙しく旅人に目をくれる人もない。茶屋もない。町はづれに色の白い媼さんが今川燒を燒いてゐるがよく話す。明日は諏訪で明神樣のお祭だから近鄕近在から人が出るとか、この今川燒はこの邊で自分の燒くのが元祖だ。十七八年前に始めた時は「一時はそりや流行やんして、夜業しても間に合ひましねえ。一夜に一斗五六升も燒やんしたぞ。」

和田峠へかゝると又雨になる。峻路六里、標高一五九八米突。一歩は一歩、登つても〳〵山又山。外山端山を行つたり歸つたりして登る。桔梗の花が美しく崖に咲いてゐる。こゝも秋草の花が咲く。仰げば峻嶺雲に鎖され、天風蕭々、白樺の葉が裏がへつて白い。落葉松は蟲々と立つ。振かへると白雲漠々、山の頂だけがその上に列ぶ。行く手からは霧と雲と雨とが交り吹つけ、傘もさせぬ。頂に近い東餅屋は石垣のあと許り、今は牧夫の家が一つ。此の邊、天氣のいゝ折には牛や馬が靑草の上に遊ぶ樣を見るだらう。西餅屋では日も下る。名物の餅を搗いてくれた。先づと火鉢を出す。夏の盛りに雨が降つたと言つても火鉢を客に出すのは奇觀だ。火が戀しい程今日は溫度が低い。紅葉こそ溪には無いが、冷りと脛に當る風は身を切る野分と思ふ程氣溫が下つて十月下旬位。

諏訪湖は峠から見えると思つてゐた。しかし見えたのは白雲ばかり。西餅屋を出て暫くして湖光が眼に映つた。湖！　湖！　山と山との間から白く輝く諏訪の湖水を見た。諏訪は近い、そこには友達が待つてゐる。

下諏訪町へ着くと軒毎に提燈を點し、旗と造花で飾つてある。今夜から明神樣のお祭である。桔梗屋で伊藤敬助、同精一君がいかに悅んでくれたか。船橋、萩庭君が早くから着いて待つてゐたか。あゝ樂しく岐蘇路の旅よ。五人がやがてゆく岐蘇には

雲もなほ下に立ちける懸橋の
はるかに高き岐蘇の山みち

（頼　實）

夜、工科大學生荒池忠吉、佐土原勳氏と、一高本間君など七人で驩迎會を開かれた。深く御好意を感謝する。（木曾奈良井にて、二日の朝七時雨の音きゝつゝ。）

第七日　行程十二里（望月より諏訪へ）計六十四里。旅費九十錢。內譯、望月泊五十錢、菓子十錢、今川燒十五錢、餅屋の餅及茶代二十錢。

木曾路

都人きても見よかし麻衣
夏はすみよき木曾の山里
（淺川列）

菅笠を傾けて急ぐ旅人も、木曾路にかゝつては笠をあげて山を仰ぐだらう。解けた草鞋の紐を結ぶ間さへ惜しくとも、木曾路では杖を立てゝ溪川の流を瞰めて行きやらぬだらう。夏を知らぬ木曾谷の綠は珠を溶した水に映り、山動き、水流れ、嵐氣搖曳して木曾の山川無韻の詩が立ちどころに成る。

鹽尻峠を越え、古戰場で名高い桔梗が原の末を過ぎると、南に深い溪谷が開ける。ズンズン道はこの內に入つて了ふ。峽谷から美しい水が茶畦桑畝の間を走つて來るのに逢ふ。その後は一步は一步、溪深くなつて行く。木曾路の旅！　おう、如何に長き日を、この溪に行かん願に過してはは暮しけるよ。

都の風塵に離れ、飄然と山水に放浪して今ここの木曾路に入るの悅び、加へて今からは五人連の旅、足どりも輕く、鶯の聲きゝつゝ五人で木曾を越すは、孤影一枚の蘭席を纏ひつゝ夕陽の餘光を浴び、また雨に袖を濡されて心細く荒れた宿驛を過ぎるより樂しい旅の日を得るであらう。

桔梗が原の末に洗馬（せば）の驛がある。こゝを過ぎると、いつの間にか溪は深い。山と山とは空に、川と岩とは脚下に迫つて、全溪の綠一時に双眸に集つて來る。幸ひ今日は雲が高い。谷を圍む山の綠も、或は暗く、時に明く、一道ゆくところ水聲鏘々。重山複水。あゝ此處である。この山この水、この清麗透徹の木曾路の旅！　知るやこの躍る心を。

木曾街道へ入つては決して急ぎ給ふな。道は谷へ溪へと入つて行く。しかしこの頽廢し荒凉たる姿は、點々として中山道を飾つてゐる。廣濶渺茫の眺は無いが、奇峭は眉に近く、雨ふれば山

樹空濛、綠の下に鐘磬の響があるだらう。決して木曾の旅に飽きることは無い。綠の間を道は曲り曲つて溪谷に沿うて行く。一谿一景。一谷は一谷、新しい景色を隱してゐる。川は一曲り毎、瀨の音さへかへて奔湍白く、淵となり瀨となる。一條の街道はこの間を縫つてゆく。木曾谷はどこから始るかと、よく人は問ふ。この邊の人は必つと櫻澤からと答へるであらう。西筑摩郡はこを界としてゐる。雪袴を穿いた男が、トボトボと肩に薪を負うて山を下るのを見た人は、幾度もこの奇異の風をふりかへるであらう。この雪袴を着けた姿が木曾の勝景に自然に捺された落款である。

おもしろいぞや、木曾路の旅は笠に木の葉がまひかゝる。と謠が聞えて、秋風客衣に遍く、全溪の紅葉が燃ゆるとき、蟲聲路傍にしげき頃過ぎたなら、その笠を叩く一葉一葉に歌が出來やう。五人は幾度顏見合せて景を談り、吟懷をこの山懈水隈に寄せたか。

白雲や若葉青葉の三十里（子規）いつの間にか藪川も過ぎた。溪間で夕日が落ちるのが早い。蒼茫として暮れかゝる夏の日をハラハラと降る雨の中を辿り、夜になつて奈良井の燈火が見えた。闇にも溪流の響は高い。（福島町 福島館に於いて。新しい木の匂がする新築の宿。四人で床を列べ、皆日記を書く。）

第八日。行程九里半、（下諏訪乃至奈良井新道間）計七十三里半。旅費一圓十九錢。內譯、下諏訪宿五十錢、晝食三十錢、繪葉書二十一錢、薦席一枚十八錢。

鳥井峠

奈良井の夜は溪川の音に、靄と雨の響を相の手にして明け、床を離れるとヒヤリとして借衣の襟が冷い。朝、女が火鉢を出したのも夏を忘れさせる。伊藤君は昨日の强行軍に弱つた年若い精一君と今日は汽車でと弱音をとうとう出した。五人男に二人缺けて三人は微雨蕭々、二人と汽車の窓に別の言葉を交し鳥井峠へ向ふ。

峠は思つた程もなく、溪流に遠ざかり、谷間に眠る奈良井の宿も白雲にかくれ、頂上の鳥居には霧が飛ぶ。御嶽は雲海萬里、蓬々として風は溪から吹き上る。

藪原でお六櫛を買ふ。信州一圓養蠶で旅人を相手にしない。雪國の習ひは軒が長く突出し、屋

上には石が乗せてある。冬に榾をたくため煤けて、荒廢した古驛の面影がなつかしい。雪袴を穿いて來る男を見ると竹取の翁を思ひ出させる。木曾風俗の今古を比べたら面白からうが、雨で路を急ぎいそげば、山容水態ともすれば雨煙る。

小木曾の谷は三四里の間二十五村ありて、男は耕し、樵り、女は麻布を織り業とし、又年若き女子等は木賊シナの皮など背負藪原あたりへ出で賣物とす。これを小木曾女と言ふ。(奇勝一覽)

とある。昔から古風な木曾がうれしい。その名も「里語に麻の皮剝ぎたるを木曾と言ふ」と奇勝一覽に出てゐる。

山吹城址は雨に、巴が淵の碧潭、山水の奇を一橋の上に集める。こゝを寫生してゐた畫家の榎本氏と寂しい旅の人なつかしく、木曾を越えるまで路づれとなつた。

福島の一夜

德音寺に義仲の墓を賽し、福島の町を山嶺丘陵の緣の中に見た。福島の町へ入る頃は雨晴れの空氣は透徹、山青く、水緣に、岩も亦蒼い。屋根の石が特に目立つ。町は案外山と山との間に木曾川を狹んで、溪谷翠微の裡に白い洋館が見えたとき、急に隧道や、鐵橋を溪谷の間に見た時のやうに、その誇りかの文明の面つきが嫌惡らしかつた。

福島で旅の思出は解き難き糸をこゝで結んだ。町に入つて旅人は第一に宿のことを思ふ。旅で宿屋程心細いことは無い。又これ程愉快なことはない。待遇の善惡を賽の目に振出す旅の双六である。福島は木曾唯一の旅に興ある地だ。思ひがけなく大學の友人久野君が村尾君とブラリ、ブラリと町を歩いて來たのに逢つて、奇遇に驚いた。聞くと大學生は三十人近くも避暑や、勉强に來てゐるから驩迎の茶話會をと言つてゐるのを、町役場では町として驩迎すると言ふ。恐入つて了つた。木曾の夕雲は靜に町にかゝつた。

「見晴し」と言ふ旗亭の二階には山の緣がさし、川瀨の響が漲る夜、電燈の光は夏の夜に明い。町長松岡氏、助役林氏、町會議員古畑、長谷川、佐藤、八木氏等十一人。大學の友人は十一人。これに木曾同行の四人が加はつて廣間にづらりと列んだ。

木曾川に鍊へた木曾節の美音につれ、町長始め木曾名物の盆踊を見せられた。窓から木曾川に兩岸の燈火が溶けて碎ける。あゝ福島の夜は更けることが早かつた。

宿は福島館と言つて新築の家。欄干に前山の微翠が寫り、木曾川は雪と碎ける。中央線の開通で木曾谷に鐵路が一線、山を鑿ち谷を渡つて走つて以來、永い眠はさめた。東京、名古屋、長野を三つの終局點にして、福島はその要である。溪谷山水の勝、人情の濃厚、町長始め西の輕井澤たらんとし、旅館設備に全力を盡し、殆ど開通第一年の夏でも大學生のみで三十名を數へる。皆こゝの住よく、人情の美を說く。まして木曾の勝景は福島を中心にして散在する。僕は町の未來に光あれと祈る。(須原の櫻屋に雨の音きゝつゝ。四日の朝七時。)

第九日。行程五里半、(奈良井より福島まで) 計七十九里。旅費一圓七十錢。內譯、奈良井宿五十錢、切手三十錢、お六櫛七十錢 (スキ、トカシ、及サシ櫛) 名物團子十錢、德音寺賽錢十錢。

棧の絕景

夢は木曾川の流に覺める。今日も亦雨滴の音がする。福島館は半町營のやうになつて旅客の便宜を圖る。雨に川水は增し欄干の下を流れる。加藤郡書記は早くから來て種々世話をされる。山本法學士や久野君も訪ねて來る。雨もやんだ。福島はよいところ、夜は蚊も居ない。木曾川の響は日夜絕えぬから涼しい。町はづれまで松岡町長と加藤書記、下村氏は送つて來られた。

この邊には稻田も見える。今日寢覺へ行く同行九人、にぎやかに福島を出た。二三人づゝ話しつゝ行く。山と溪とは或は廣くなり、狹くなり、木曾谷の森林美を說くには福島以南にある。

木曾節にも、

木曾のナアナカノリサン、木曾の名木ナンヂヤラホイ。檜に槙ヨイヨイヨイ、檀にナアナカノリサン、檜にあすひナンヂヤラホイ。かうや槙ヨイヨイヨイ

と言つて、御料林の鬱々たる光景は、「木一本に首一つ、」と言つた昔も今も變りはない。

棧(かけはし)の絶景は上松(あげまつ)へ入る前である。昔の棧道のあと。今は芭蕉の句を連想させるところでは無い。兩岸迫り懸崖絶壁となる。岩の裂目に岩躑躅が紅く咲いてゐる。碧湍忽ち岩に碎けて花のやうに散るかと思ふと、渦となつて流れる。鐵道が崖の上を走り、緣樹の間に隱見する。茶店があつて名物あんころ餅を賣つてゐる。景の整うた所としては木曾第一の眺である。上松では御嶽ゆきの白衣の行者にゆき逢うた。黑百合の花さく御嶽へは、雨のために遂に登臨の快を捨てねばならなかつた不運を鈴の音に深く感じた。

寢覺の床

寢覺の床は昔々幼い時分から繪や寫眞で見てゐたその儘の景色が眼前に現はれたので、木曾路の旅で最も興深い印象を受けた。清流一帶、波たち、渦きつゝ兩岸の翠壁を貫いて、千態萬狀の岩を水上に殘してゐる。潭は深い、岩は巨い。岩上の松風は峯を渡る風にかよひ、水の響に巨巖上の小祠は漂ふ許りに、緣の松に相映じ、眞に絶景である。磊々たる岩に傳ひつゝ下り、祠畔の松に凭つて思ひおもひに景を眺めた。

名物蕎麥切はこゝで名高い。福島からわざわざ一行の爲に、町の娘子さん達が汽車から辨當を持つて見物旁た來る。「晝顏にひるねせうもの床の山、」と芭蕉の句がある臨川寺の欄干を拂ひ、毛布を敷き、寢覺の床を瞰下して晝飯を食つた。川の音は夢を誘ひ、蟬の聲に、ともすれば睡を催す。折から雲が少し切れ、松の影が毛布の上に落ちた。禪寺の晝は靜かである。

風越山の下を流れる川を滑川と言ひ、之に懸る橋は八景の一つである。こゝで福島へかへる一行と分れる。福島の町よ、木曾谷の夢に美しい福島の町よ、さらば。

小野の瀧は汽車が出來て全く風景は毀れたと言ふ。名を聞かねばそれとも思へぬ。到るところ鐵道は好風景を毀してゐる。駒ヶ岳の赭褐色の頂を時に仰ぎ、木曾川は次第に廣く、森林の美益々加はる。須原へ着く頃は又雨になつた。秋風のやうに肌寒い。停車場前の櫻屋支店へ宿る。

福島では非常に驩迎された。意外に多くの友人にも逢ひ、町長始め町民が如何にして發展しやうかと努力する樣が總の點に現はれてゐる。友人達も皆福島の風景のいゝこと、避暑にも靜に勉强するにもいゝ所だと口々に言ふてゐた。將來は西の輕井澤となり避暑客が群集するであらう。

僕は種々の寄贈品を受けた。岡本寫眞館木曾風景寫眞十枚、下村、松岡新聞店繪はがき四組、町役場から木曾路福島案内等。(妻籠へ分れる吾妻橋畔山田屋の窓から懸橋を眺めながら四日の夕方記す。)

第十日。行程五里半(福島乃至須原)計八十四里半。旅費二圓六錢。內譯、福島泊五十錢、小包料十六錢、木曾案內二十錢、須原花漬一圓二十錢(八個)

殘山剩水

昨宵は夜毎に見える孤火も、とうとう出なかつた、宿の主婦は旅の人に見せたいと、頻りにその美しさを說いたのに。須原の宿は又雨に明け、木曾川の水量は增してゐる。雨の音は益々繁く、山は朧になる。心細いこと限りない。船橋、萩庭君は汽車に乘り遲れたが、二番で名古屋へ行くと言ふ。二人去り又二人に分れ、群巒重々の間、木曾の殘山剩水を畫家の榎本氏と二人で辿つて行く。朝飯に名物の山芋汁のうまかつたこと。行く手の山は雨に隱見し、變幻暫くも留まらぬ。

雲と雨とで木曾路の眺は生動する。檜笠を被つた榎本氏は山の容や水の態をスケッチする。僕は傘をさしかけて雨を防ぐ。野尻の町では溝に水があふれ、白い家鴨が町の眞中を尻をふつて走つてゐる。路が坂になると小川のやうに流れ落ちる。しかしその水は澄んで珠のやうである。路傍の草は水に飽いて綠いよいよ濃い。

千山萬壑、雲簇々と湧いて、木曾川の濁流は滔々と山の裾を流れて箭よりも早い。中山道は高い崖の上を川に沿うて、茅屋村舍の間をゆく。雪袴を穿いて木曾男が心配さうに川を見てゐる。川から簑笠つけて鳶口持つた男が三々五々登つて來るのを見る。どうやら木曾は洪水らしい。簡席から落ちる滴は流れるやうになつた。傘もつ手も重い。氣溫が非常に下つて肌は薄寒い。風が吹くと全身ひやりとする。街道の側の家では、どの家も爐に火が紅く、炎を圍んで密々と語るのは水の噂であらう。永い永い間雨はよく降る。木曾川は一刻一刻水が增す。

山は靜かに水は狂ふ、木曾谷は今物凄じい光景となつた。ふと見ると松の梢が水の上に僅に出てゐるのを見て非常の出水であることを知つた。幸に木曾谷は深いから中山道は危險はない。遙か空の方は峻峯高嶺朦朧として高く聳え、一抹の白雲靜かにかゝつて斜に飛ぶ。木曾五木は全山

轟々と繁り、木曾川は雨に赭黄の色を增す。點々として巨人のやうに突立つ峯の姿は黑く、その下を水は狂ひ狂うて奔る。岩を乘り過し、崖を打ち、岩を嚙み、崖を乘り越し、轟々と萬雷一時に落ちたかと思はれる。飛沫丈餘奔騰し、水柱は高く空に碎ける。見る見る水が岩を蔽ひ木をひたす光景が眼下に見える。又街道でも山際の谷間に山崩れのあとが二三ヶ所もあり、路を遮つてゐる所もある。昔は命にからむ蔦葛に旅の心細さを歌つたが、今日は行くも歸るも知らぬ土地であるから、殊の外物恐ろしい。一日中黃昏のやうな弱い日の光が谷にさしてゐた。

風が渡ると林影一時に動くが、山は微動だにせぬ。川は荒れ狂うて紛糾錯雜するに從つて、山は益々沈默に入る。何となく大自然の哲理を心と心とで會得したやうに思へた。山や溪の崖に時ならぬ瀑布が出來、白雲徂徠する光景は實に雄大であつた。

天候の都合で三時半だが宿につく。夜半の嵐が雨戸にぶつつかる。木曾川の流は夜陰にこもつて物凄い響を立てる。川に臨んだ一室に夢は幾度か破れると、廊下を宿の男が微宵提灯つけて警戒してゐる。サア心配で目は冴える。薄暗いランプが煤けて光つてゐる。床の間の姿見に寫るのも物凄い。晝の疲れにウトウトすると、一しきり家も搖ぐ風の音に喫驚りして又覺る。(嵐はやんだ。五日の朝の光は木曾川からみなぎる。雨は又ふり出した午前七時記す。山田屋にて。)

第十一日。行程六里(須原乃至吾妻)計九十里半。旅費八十九錢五厘。內譯、須原泊五十錢、小包三個二十四錢、饅頭(晝飯代りに二人にて)十錢、草鞋二足五錢五厘。

嵐のあと

ゆふべ夢現に暴風が家を搖り、ゴーッと萬山を動搖さして過ぎ去る響を現ともなく聞くと、廊下には跫音がして、「空には星が出て、この風でなも、……」と榎本氏と宿の男と話してゐるらしい。屋根を吹剝られさうで、その上、表戸は二度まで弓のやうに曲り吹倒されたと言つてゐるやうであつた。朝がたウトウトとして警戒する男の跫音と提灯の光とを風の響の中に夢の如く淡く覺えてゐる。風が吹く度にランプが搖れて、ユラユラと部屋の內に微光の波がうつ。いつかぐつすり寢に入つた。

木曾の宿りのこの宿は男許りで質朴な木曾と言ふ感が殊に深い。主人が今朝は自分で川に行き

掬つて捕つた川魚を燒いて來たのは氣に入つた。流に臨んで窓から瞰下する木曾川の水は落ちて、川原に磊々と石や岩が現はれた。山國の川は水の出ることも早いが又引くことも一夜である。山の後から碧空が見え、むら〳〵と白雲が湧いて來る。空は晴れた。始めて雲は切れて朝日が木曾川の波に輝いた。

嵐のあとが明に殘つてゐて、朝露が雨の如くに落ちる。路は吹折れた小枝や木の葉で推く、踏めば簌々の響がある。一町に一、二本は必ず崖の上から大木が吹き倒された大地に横る。道を塞いでゐるが杣人の多い木曾だから、朝早く立つ旅人も、大方枝を伐り落し幹だけが露けき道の草の中に狼藉として横るのを見るだらう。しかし行くに從つて未だ取除かれぬところがある。木の枝を分けて行く。葉に袖が當ると、バラバラと昨夜の名殘の露をこぼす。山崩もそこ〳〵に見える。

木曾の木曾たる山水の美はもう求められぬ。溪谷が次第に廣がるに從ひ山が遠ざかる。兩山の翠が二重に影を寫す木曾谷に一道九回し、溪流は深いが、吾妻を出てから暫くして山も川も遠のき益々凡化して了ふ。崖を飾る蕚の花が八つの花をつけて薄紫の鞠の如く、兎波木菊の間に咲いてゐる。夏の日かげは遍く照し、雨後の透徹した空氣に紺青の山淸く、白雲の閃耀目を射て、ポカポカと小春のやうに肩が温い。

木曾路の旅は今終らうとしてゐる。渾然として珠の如く、なだらかな山の傾斜は牧場の如く、溪流潺湲の響あるは洗馬附近である。溪谷の趣、山のただずまひ、岩石の布置に自然の巧を賞づる人は鳥井峠を越え福島までの間を探るがいゝ。木曾の森林美を味はふには上松から須原邊に下るに從つて益々その美を發揮する。須原を下ると木曾川は嘈々と音たてゝ流れ、急流に秋は筏が幾つも冬にかけてから下ると言ふ。鉞の響にやがて地響たてゝ倒るゝ大木も多くは此の邊である。城山のある妻籠の入口、吾妻橋までは木曾川の眺めに都合がよく、木場で筏を組む珍らしい光景も見ることが出來やう。木曾は全溪百を越え、一溪一谷、皆蘇溪の異を藏し、奇を集めてゐる。妻籠以南は舊道を行かねば、新道は益々平凡。美濃に近づくにつれて平々凡々。

美濃路へ、「風吹けば怪石千崖舞ふ、」と言つた木曾川に別れて、赭土のほり〳〵した丘陵つゞきに出た時は落膽した。畫家の榎本氏に中津川で別れた。こゝで始めて東海線の不通も知り、水害も聞いた。下山君の安否も氣遣はれる。あゝ君は今頃何處にゐるだらう。君の上に神のみ守あ

らんことを！（美濃大井の里。信濃屋にて。月が大分圓くなつて田圃に蛙が鳴くのを聞きつゝ、五日の夜九時。）

第十二日。行程九里半（吾妻乃至大井新道）計百里。旅費七十二錢。内譯、吾妻橋畔山田屋泊五十錢、生玉子七錢、切手十二錢、草鞋三錢。

美濃路のたより（其の一）

I——君足下

都を出でゝ、もう幾日を過しただらう。今日虎溪山から下りるとき、夕月のかげが多治見の炊煙微かに立ち登るあたりに黄く出てゐた。美濃の原野は蒼茫として暮れかゝるとき、田圃の蛙の聲を聞きつゝ水害の跡慘澹たる多治見に歸つた。

大井の里を朝立つとき、ふと思出す、

早發驅馬、以涉山路、曉霧如銷、驚雲如湧、鬱結若巨象、蜿蜿若虬龍、

畫法最奇古、（漫遊文章）

此は未だ山が禿げず、土が赭褐色に燒けぬ頃である。今は美濃の國程山水に貧乏してゐる國は無い。山はあつても高くない、川があつても何の奇もない、田圃の間を平凡に流れてゐる。濃尾平野が海面を拔く僅か四十尺許の平蕪、その亂雲迷ふ光景を除けば、一として他國に誇る景は無い。僕がもし巨人だつたら三跨ぎで美濃を過ぎる。一歩は象山あたりの木曾川の流、二歩は岐阜十八樓の景、三歩は關ヶ原。

中山道は參謀本部の地圖に麗々と大湫、細久手に十三峠から通じてゐる。聞けば耕雲齋が大砲引ずつて通つて以來、もう明治初年からの廢道、今は人馬も入らず、唯鳥徑走獸の跡許りと聞いて一寸考へた。釜戸迄下り御嵩へ出る位なら、廻道だが東濃第一の勝境、昔は七坊、寺領五十餘石を有した虎溪山の夕の鐘を聞かうと思ひ立つた。

雲の峰群がり立つ夏の空はギラギラと目をさす。丘陵は丘陵に重り禿山つゞきの街道には飽きて了つた。釜戸で保母影の人に捕つて、椿の木美しい天猷寺、藻の花うく白狐の冷泉などに案内された。白雲の奔騰、雲の峰の閃躍、この日の正午程胸惡くなる迄蒸し暑くなつた事は無い。こ

の川下にチブスなど流行すると聞いて美濃は益々厭はしい。保母影の人は在所の事で何も無いがと言つて、南瓜や玉子で晝飯を椽に腰かけ一緒に食べた。惇朴な田舍の風が面白かつた。

洪水のあとが瑞波から特に目立つ。多治見に入つてその慘澹たる光景に驚いた。僕が二日早くこゝに着いたら、恐しき一夜を旅に過したであらう。橋は落ちる、田は荒れる、人家は泥になる、街は洗はれて河原のやうだ。こゝを抜け兩藤舍の主人に導かれて、あの有名な美濃の名山虎溪山へ登つた。

虎溪山は僧疎石開基の一禪院。足利氏本願、土岐氏の修造に成る古禪林。たゞそれだけに過ぎぬ。土岐川が山の峽を貫いて成る程下を流れ、僅に潭となり、淵を湛へ、岩が聳え、その上に松と雜木とが生えたに過ぎぬ。山水の價値は疑はしい。それよりは此の山から多治見の市街を下瞰し、土岐川が綠野に白く、遙か峽谷を造つて向の山に隱れる光景が勝つてゐる。たゞ本堂だけは文和の昔の建造、どことなく密林の間に、ゆかしく建つてゐた。赤土の禿山も昔は「山中一筋の道だになく、」參禪の志ある者は竹叢の陰、密樹を分け、溪谷を登つて來ては、夢窓國師を嫌がらせたであらうか。それとも

世の憂に代へたる山の淋しさを
訪はぬぞ人の情けなりける

と歌つた虎溪山を僕は間違へてゐるのぢやあるまいか。山を下るとき西日は雲に落ちて餘光半天に五彩の光を拋げてゐた。稻田を渡る風は涼しかつた。(多治見びいどろ屋にて。記し終るとき今日の道中で、ふと干瓢の白い花の下に班猫の黃い目玉が光つたのを思出した。六日夜十時)

第十三日。行程九里(大井多治見間及虎溪山往復)計百九里。旅費九十九錢。內譯、大井泊六十錢、サイダーと梨十八錢、草鞋六錢、ハガキ十五錢。

美濃路のたより (其の二)

L——様

里芋の葉に溜つた夜の露が、微風に搖れホロホロと落ちる頃、多治見の町を出發しました。此の邊見ゆるものとして洪水の痕をとゞめないものはありません、今日是非とも岐阜までと思ひま

したから、傍目もふらず、スタスタと急ぎました。之れは木曾須原で別れた二人の友人が、丁度彼の嵐の夜、三河にかゝつた時分ですからその安否も氣遣はれ、岐阜に行けば留置郵便を出す約束なので、一刻も早く行きたかつたからです。

豐岡町で、「新愛知」を一部貰ひ、心は急きますし、私はそれを讀みながら小一時間も歩きました。天龍の洪水、豐橋の水。一方安心すると共に又一方は心配です。

水々しく青々と山も水も美しい木曾谷から出て、赭禿げた美濃の山を見ますと何とも言へぬ淋しみを感じます。丘陵つゞきで小川ばかりがチョロチョロと流れてゐます。私は餘程行つて、やつと遙に薄紫に匂ふ山の容を見ましたとき、沙漠を旅する隊商がォアシスを眺めた悅びと同じ嬉しさを覺えました。

太田の渡に出る迄の殺風景なのには驚きます。空には雲の峯がいやが上にも湧き、ギラギラと目も眩暈くほどです。それに道は燒け、草いきれが一通りでない上に、稻の葉の強い匂がむせるやうに往還に漲ります。川でもと思つても、それは小石許りの河原に、水草が泥にまみれてゐる位です。丘には雜草と灌木、立木があれば赤松ばかり、蟬の聲は暑い暑いと鳴いてゐます。まあ見渡す限り暑苦しい平野の眺めではありませんか。

たのむ木陰も無く、旅人にとつて何より嬉しい清水もありません。氷店の前では幾度か立留りましたが、度々の御戒をうけ、又田中法學士(信良と仰る仁の方です。)から福島留置小包で腹卷、白砂糖に日光のお守札までつけて送つて下さつたのに添へて、くれぐれも注意がありましたから振りかへりながら過ぎました。遂には梨の實があるのを見、木の實の汁を吸つて渴を癒しました。體は充分注意して參ります。

久々里の宮に鯉の池と言ふのがあります。それは景行天皇が此の地に宮居せられしとき、寵愛せられた后の如何にしても面見せ給はぬに、天皇もホトホト困じ給ひ、庭に池を堀り、藻の花うけて、パチパチと拍手につれ池の鯉が群れ浮ぶやうに設らひ給ひ、后の興がらせ給ふとき水鏡に后のあえかの御姿窃み見給ひしとかの傳說があるさうです。又鳥の脚あとある化石、月の糞、穴居の趾などもあるさうです。しかし道が異つて殘念ですが寄らずに行きました。今渡まで四里十二町を三時間で歩き通し、太田の渡近くで道を右に行くのを左に間違へ一町も參りますと、後から自轉車で白服の巡査さんが追かけて來て、道を違へたのでないかと親切に云つて下さいました。

この人は須和氏で萬朝の愛讀者。私が急ぎ足に行くのを見て、もしやと追かけて來られたさうです。

今渡の素封家丹羽伊兵衛氏も、この騒ぎに渡の方へ私を捜しに行きかけやうとされるところでした。私は又心からの驩迎にとうとう岐阜行きを止めねばならなかつたのです。私が通る時、旗を造るため毎日習字の稽古をしてゐたと言つて私の姓名が大きな紙に黒くなるまで書かれてゐました。都のたより聞きたいと留められるまゝ、一夜を太田の渡近く木曾川の畔に泊りました。

今宵は十三夜。月待つ秋草の香に、さぞ水のやうな月影が座敷に流れてゐませう。庭に水うち、燈籠に火を入れ、丹羽家傳來華山筆老松の畫幅をかけ、(これは今春一度賊の手に落ちたのが、後小包郵便で送りかへして來たさうです。)蟲の音が鉦を叩くやうな夕べ、祝のビールに微に醉つたのは、今宵だけはお許しなさるでせう。(丹羽氏宅にて、夕方手牒の端に。)

第十四日。行程四里半、(多治見今渡間)計百十三里。旅費八十八錢。内譯、多治見泊七十錢、虎溪山繪葉書一組八錢 梨と桃十錢。

美濃路のたより (其の三)

芭蕉

II——君足下

このあたり目に見るもの皆涼し

月が金華山の頂を離れた頃、鵜飼舟へ艀で淺瀬を渡ると、小波が碎けて蒼黑い山の影が水に映つてゐる。月の明りに山は浮び、水の限に遊舟の燈が點々一所に集つてゐる。長良の川浪は岩にむせび夜は更けてゆく。

殆ど斷念してゐた長良の鵜飼を夕食も半に箸を棄て、十八樓から飛舟で行つてやつと岐阜提燈のついた遊覽船に乘り移ることが出來た。繪にも畫けない、文でも綴れない。寫眞では川の音が寫らぬ、文章には船が動かぬ。鵜が水を潛つて、青い水の底に黑く閃めく光景は到底一度見ねば言へぬ。書けぬ、寫せぬ。

長良の鵜飼を待つ間、稻葉山が夜目にも月の光を浴びて黑く空と水とに影と姿とを見せる。手

に掬へば水が青い。底の小石も算める程十四夜の月の光は水の底を走つてゐる。花火が時々船から凄じい勢で水の上を走りながら火花を散らす。――時も大分たつたが未だ鵜飼の火が見えぬ。

松火の炎が斜に川風に靡くと、今迄淺瀬に止つてゐた船が一度に鵜飼船に近づいて、その周圍に寄る。鵜飼は始つた。

松火が水に寫り、碧瑠璃の波を潜る鵜は鵜匠の引く手さばき一つに、綱のまにまに水煙立てゝ水上を游ぐ。松火がバラバラと火屑を水に落す。もつれてはほどき、右に左に、鵜匠の手さばきが早くなるにつれ、鵜は香魚を嚙にして水上に現はれる。すぐ手繰つて香魚は舟に吐される。鵜匠は鵜の首玉を掴んで水の中にボンと抛げ出すと、そのキョロリとした鵜の目玉までが見え　程舟は近づく、又松火と提灯の火が明るい。

一艘の鵜飼舟に十艘近くの遊觀船が群るので、舷々相摩す活劇が演ぜられる。客は舟子を勵し此の面白い光景を少しでもよく見やうとする。緊張した心は數羽の鵜の一ッ一ッをも見落すまいと舷を掴んで半身のり出せば、窶れた旅の姿が松火で水に寫つた。ふと舟が止り、火が亂れる、いつか長良橋の下に來てゐる――川瀬の水音が靜かに流れる。幼い頃父に伴いて網打の供をした頃の川音である。昔を偲びながら鵜飼は濟んで、舟は下る。この間鵜飼が始つて僅に十五分。

舟から上つて十八樓にかへると、女中が「オキャーリ遊ばせ。」と言つた。川瀬の響は長旅の疲を夢に誘ふ音である。月で川の面が少し白くなつた。山は遠のいて、月が出てから星の光が薄れた。信長の首を納めたと言ふ向岸の寺の鐘が、もし今響いたら三百餘年の哀れを告げるであらう。夜が更けるにつれ水の音が淋しくなる。長良十八景を一目に集めて翁の句に今も岐阜の名所の一つ、十八樓の川に臨んだ棧敷に長くなつて、此の手紙をかく折、岐阜提灯の火が川風に微かにゆれる。長良の橋の火が水に碎けてチラホラと遊船が一つ二つ三つ。

太田の渡を渡つて今朝暑苦しい松の並木を獨り急ぐ頃は、此の涼しい十八樓の夜を我がものとする樂を思ひも寄らなかつた。丹羽氏と須和氏とに送られ太田の渡に木曾川を横切つたとき、藍青の山匂ふ木曾五日の旅を思ひ、餘りのなつかしさに舟から青い水を掬へば、珊々と玉の滴は水に落ちて響く。冷い水の感觸は全身に泌みて、遙か、遙か山のあなた木曾谷の峽間に涼しい町や村を思うた。

それから通つた各務ヶ原は昔から暑くるしい草原であつた。今も松原つゞき朝ゆくなら並木の

松が東から、夕方は西日に松の影が西から寫り、飛ぶ鳥のかげも亦地に寫るだけが興である。白芙蓉にからむ正木の葛の赤い花が埃の上にこぼれるのも尙更暑い。(八日。長良川の畔十八樓の川風凉しい一間で、午後十時。)

第十五日。行程七里半(今渡岐阜間)計百二十一里。旅費六十五錢。內譯、泊賃無。晝食三十五錢。梨と林檎十錢、岐阜やうかん二十錢。

美濃路のたより (其の四)

F——君足下

東京を立つとき、君は僕の爲めに湯島天神に道中安全を祈つてくれたから、總ての災難から免れ無事息災に道中してゐる。之れに引かへ君は別れてのち水難に遭ひ、川止を喰ふなど實にお氣の毒だ。

二十五日の嵐は噂に、連日の雨と言つても君と一緒の木曾路、御嶽登を中止して吾妻橋畔眠られぬ一夜、思へばこの夜こそ、もし連がなかつたら僕は御嶽に登つてゐる。絕頂の暴風、あの凄じい風に如何して無事に過されやう。考へてもゾッとする。その夜は星が出て凄じい暴風だつた。翌朝は街道に抱く位の大木がゴロゴロ倒れてゐた。

岐阜の鵜飼を見、金華山に月が隱れ川がやゝ暗い間に急流を息をもつかず流れて下る面白さ。好風景毎に友を思ふ。切にこの夜君と共に盃を叩いたならばどんなに愉快だつたらうと考へた。

面白うてやがて悲しき鵜飼かな　芭蕉

翁と十八樓とは離されぬ。長良の川風が簾を吹く三階で、「面白うて」の軸や、名人名士の寄せ書を樓主が羽織、袴で見せてくれた。僕にも一つと突き出されヒヤリとしたが、とうとう紀行文の一節をなすつた。九月に歸つたら僕も必つと習字の稽古をする。

名和昆蟲研究所を參觀した。名和氏は不在。白蟻の試育實驗や、標本を見た。それが僕の鄕里小倉から來たと聞いて一層なつかしい。說明を聞く中、思出した事がある。僕が幼い時分、この羽蟻がお祭の夕方、(東京の緣日位の小祭)霞のやうに飛んで來てランプや露店に群るので、店はたゝむ近所の家は戶を閉め、今迄騷いでゐた人集りは、頭や肩を拂ひ合つて逃げ出し、お祭がオ

チャンになつたのを朧ろに覺えてゐる。この蟲なら僕が熱く知つてゐる。芋蟲のやうな女王、卵も、兵蟻、職蟻も見た。學名は Termes Vulgaria Haviland.

水鄕の美は海拔四十尺の濃美平野に。平野は一目に山の裾から山の際まで見渡せる。少し小高い土手に登ると、揖斐、長良、木曾の三大川が靑い平野を白く流れてゐる。さうして水が到るところに湧き流れる。溝がある、小川がある、流は流と交はり、底に藻の花が咲いてゐるのは水がまだ引ききらぬからであらう。川柳が隈どる、橋がある、水車が廻る、蘆荻しけり、街道は松並木がつゞく。武藏野は路が非常に多かつたが、美濃平野は小流と土手とで縱貫橫通である。水鄕の美、靜かに眺むれば美濃には捨て難い水の景色がある。まして雨雲が平野を蔽ひ變幻極りない。遙か地平線の方に薄く山の形が現れる。前の山に見る見る暗雲低く垂れ、並木の松が霞む、やがてザーッと大粒の雨が來る。一しきり傘も漏る位、それがいつか小流に波紋ゆるがせる小降となる。雲に隱れた山が白雲の間に斐まで明に現れる。谷壑から雲が昇る。ふりかへると溶けるやうに斜に線を引いて雨は金華山の方にゆく。これが雨雲の一つである。こんな風に右から、左から、前後に、とても一々應接に暇ない位。

岐阜を出たのが正午だつたから、養老へ辿りついたとき山は暗かつた。體は疲れて了つた。遂今し方聞いて一里と氣を取りなほしたのに、次に聞くと二里と言ふ。僕は曰ふ、もし行き暮れて旅になやむ旅人が道を聞いたら、それはたとへ後で失望するにしても道は近く言ふものである。

（十日。彦根やり屋にて養老にての稿をつぐ。夜九時小犬が庭でしきりに吠えてゐる。）

第十六日。行程七里半（岐阜養老間）計百二十八里半。旅費二圓二十一錢。內譯、岐阜泊一圓八錢、鵜飼乘合舟四十三錢、鵜飼エハガキ三十錢、晝食三十五錢、草鞋二足五錢。

美濃路のたより（其の五）

II——君足下

菊水の水の響は夜をこめて枕に注ぐ。曉方に雨かと戶をくれば晝なほ暗い杉の木立の間に祠が見え、その下から滾々と靈水が流れてゐる。菊水樓の一夜は爽に明けた。まだ朝霧の晴れやらぬ中、高木八郎君と二人瀑見に行く。素心庵の噴水が淋しく水を撒してゐる。こゝは素心尼の庵室

である。旅の疲れで少し苦しんだ僅ばかりの坂に、櫻や楓が一面に青葉してゐる。

養老瀑布は劈崖と青葉との間に水晶簾を垂れる。飛泉層々、岩に碎ける明珠の響清く、水泡は雨となつて傍の奇巖に注ぐ。瀧壺のないので水勢が強くないことが解るが、同時に夏は頭からこの清縞練中の不動明王となることが出來る。有名な孝子源丞内のことは誰も知つてゐる。

大伴東人

從古人之言來流老人之變若云水屠名爾負瀧之瀬

山を下りるとき折々雲が切れて揖斐川が白く光る。送つて來た高木君に別れ、關ヶ原に向うてから美濃の國の水の美しいことを益々感じた。蘆荻蒲葦の間、四手網がギーッと上る。川柳の枝をひたして透徹る水がギーッコトンと稀に水車を廻す。覗くと小魚がスイスイと藻の間を泳ぐ。

關ヶ原の眞晝の暑かつたこと。雜木林が山の麓から一面につゞいて蒸し暑い往還に近く桐の實が房々と實つてゐる。往來には人は一人も出てゐない。叢に大きな蛇が走つた。曾てはこゝに百萬の軍が鬪ひ、旌旗亂れ、夏草の綠も紅に染んだ慶長五年九月十五日を思へば、一木一草みな惆悵顧望せしめてやまぬ。けふは古戰場を吊ふに相應しい夏の日である。サヤサヤと鳴る草の音、ザーッと渡る風、ゴーと言ふ汽車の響。石田を思ひ、家康を偲び、小西を慘む。關ヶ關は狹いが旅人の最も興がるところである。黃石は吟じた。

回首原頭下馬過。松風如聽大風歌。某丘某阜悉堪仰。最見勝軍山色多。

不破の關は址かたもなく、斷基空しく路傍某家の庭園中に殘るばかり。日本三關の一は斯くも不遇である。これから近江路にかけて丘山重々、名勝舊蹟は散在する。關ヶ原は馬上に坐眠して捕はれた佐殿賴朝のこと、青墓に夜叉御前は哀をとゞめ、小栗判官照手姫の艶物語、春王安王の古墳もあれば、「大切の名を窃」まれた熊坂長範物見松もある。

寢物語は人家相隣り、壁一重の美濃近江、寢物語に兩國の稻の出來ばえも話す。

鬼貫

ふむ足や美濃に近江に草の露

また兩國の山が白雲の間に、

右ひだり見てゆき行けは近江美濃

ふたつの山ぞたけくらべする

（藤川）

醒が井の驛は昔の名所圖會そのまゝの家並、荒れた里を巡禮が來る、托鉢僧が歸る、牛を追うて子供が通る。茶碗や、釜を洗ふ小流のほとりに、頭のテカテカ禿けた翁が西日を浴びてヌッと

立つたのもいゝ。筑紫戀しつくし戀しとなく蟬に、峠一つで秋は早く來てゐる。こゝはもう近江路である。(十一日夜八時、八幡にて。蚊の多い湖のほとり湖水を渡る汽船の汽笛をきゝつゝ。)

第十七日。行程十二里、(養老彦根間)計百四十里半。旅費一圓五十二錢五厘。內譯、養老泊一圓、晝食三十五錢、氷砂糖十錢、梨五錢、草鞋二錢五厘。

湖のほとり

まだ通路もあさぢふの小野の宿より見渡せば、斧斤を磨きしすり針や、番馬と音の聞えしは、此山松の夕嵐、旅寢の夢もさめが井の、自ら結ぶ草枕

と、謠曲「東下」を逆にして、「旅ごろもほころび」縫ひたい磨鍼峠(すりはりたふげ)にかゝつたのは昨日の午後であつた。朝鮮使節がその昔、「極東の一大湖の靜景に接してよく立ち去ること能はず、望湖堂の三字を殘し」て去つた磨鍼峠の熊笹の間に觀音堂があつて、清水が溜つてゐたのが何より嬉しかつた。

梟がボーボーと鳴いてゐた。初めて琵琶湖の帆色鷗影を一碧鏡の如き上に見たのも、この峠である。眞紅の夕日をうけて赫と燃え雲と水と相映じ、滿天滿地焰の海かと思はれ燦爛の美を盡したのもこの時である。あゝ夕陽は今沈まんとする、餘光を受けぬ山は黛色鮮かに匂うた。

昔京の方から一人の書生がトボトボと學成らず空しく鄕關に歸る途中、この峠で一人の媼が斧を磨いてゐるのを見て、何にするのかと尋ねた。媼は針に磨らうと思ふと答へる。彼の書生は胸中忽ち何物かの響を聞き、その儘京へ向つた。後年學成り名遂げて、めでたく再びこの峠を越えたと言ふことが何かの本にあつた。

彦根の宿で源五郎鮒(一說夏頃鮒)と鯉とは間違なく膳にのぼつた。蚊の多い彦根の宿りもあけて、朝露に涼しい金龜城を一覽する。天主の眺めは彦根町を一眸の裡に收め、又湖水の淸澄、竹生島を水煙糢糊の間に眺めた。樂々園の池を廻つて緋鯉をよび、八景を形どつた泉石の美これ程整つたのは稀と思うた。(冬の雪景色が特に良いとのこと)堀の柳は青く、松に當年の思をよせ、彦根の町も見物し物靜かな文泉堂の一間で　陛下御料となつた鳥居本の西瓜に先づ齒にひゞく冷さを味ひ、町端まで送られて彦根を出た。

朝鮮人街道と言ふ名が面白かつたので、之に沿ひ八幡に向ふ。地が低いから湖水は見えぬ。たゞ對岸の繖峯蜿蜒と連り、湖面から立つ水蒸氣の爲に朦朧と薄紫に染み、雲の峯は盛に立つ。稻田のそよぎ、松並木の街道を狹み一路半荒草離々、目をくらます夏の雲は碧落を蔽ひ、太陽はヂリヂリ照りつけ、汗は流れるやうに出る。美濃の水は美しく徹つてゐたが、近江の水は濁つて、よどんで鐵の臭がする。この日程苦しい思をした事は無い。漁村蟹戸の眺め、田圃の連亘、稻葉の波も、もう目に入らぬ。暑さで頭がグラグラする。重い足を引摺りあへぎあへぎ歩く。

八幡町に着けば炊煙逶迤、風情ゆかしい山の麓の淋しい町。しかし瓦甍白堊入日に照り映え、物靜かな夏の夕は湖水の畔に來た。窓のすぐ下から屋根が突出し、その上に松の鉢植がある。次第に暮れる空にピカピカといつの間にか星が出た。今宵空に纖雲なく靜に靜に夜は轉ずる。夜更けて隣客が密々と話すのがと切れと切れに聞える。獨旅は特に心細い。蚊の聲が蚊帳をめぐつてゐる。(氣持のいゝ大津魚善の離座敷で雀の囀と白鷺の聲きゝつゝ十三日朝。)

第十八日、行程七里(彦根八畫間)　二百四十七里半。旅費七十七錢。內譯、晝食三十五錢、卵二個七錢、切手十五錢、サイダーと梨二十錢。

近江商人

朝早く琵琶湖の畔を立つ旅人は、稻葉に置く露の光がつゞき、その先は紫がかつた霞にこめられて比良の連峰が立ちつづくのを見るであらう。湖は見えない。湖面から昇る水蒸氣が水平に山の中腹位までを帶のやうに隱し、その上に現れた山の谷々には、昨宵の宿り雲がまだ動かぬ。街道は低いから山の影が漣漪に落ちる光景を見つゝ、朝風に吹かれてゆく幸福は斷念せねばならぬ。

夏の夜は明け易い。どんなに早くと宿に急かせても新しい草鞋が土に觸るゝとき日がカンカン近江路に照つてゐる。さうして近江商人はもう天秤棒かついで往き來さの忙しい時である。

近江商人は日本中に知れ渡つた旅歩きの商賣を選ぶ。京阪の大問屋の大部分は近江商人である。しかし如何に他鄕に成功しても故鄕の庭園を棄てぬもその一特色と言ふことである。「近江名跡案內記」に、

此國は土地膏腴にして收獲多し、然れども沿湖の村落は屢々洪水の害あり。古來地租の重き所にして民益々僅少なれば、中郡の人は商賣を業とし、他州に店舗を設け、其行商の風俗たる四方に往來し、貨物の有無を通ず。之を近江商人と言ふ。初め其家を出づるや天秤棒一本を肩にし東西に利市し、歸家又棒一本を肩にするのみ……、

今も昔も變りはあるまい。木曾路から美濃にかけて、昔の驛場につくと、「近江商人御定宿」の看板が多かつた。産物の重なものと言へば近江麻布類である。毎日干瓢の干してあるのも目立つ。

琵琶湖を廻りて

皇州近在彩雲西、流石に近江は京近く歌枕が多い。之れも皆京めいてゐる。「さしてよるべも浪枕」の朝妻の里。「冬ふかく野は」なる頃の伊吹山の懸崖春草萠ゆる頃には羚羊飼ふ牧人の笛も響く。八艘隱しで有名な岡田の近く八幡の宿を出て、この日通つただけでも祇王の生れた里を過ぎ、「いざ立よりて見てゆかん」鏡山。俳藤太がかぶら矢響いた三上山は近江富士の名さへ冠つてゐる。姥ヶ餅に昔の哀れを談り、「むすびもなれぬ露ぞいぶせき」草津では東海、東山兩道が一筋になり、日本六玉川の一つ

うちしぐれふる里思ふ袖ぬれて
行くさき遠き野路のしぬ原　（十六夜）

野路の玉川には萩の花うけてサラサラと流れ、落鮎を追ふ景色や、萩の下葉もる露の光に月を宿すのがよかつたらしい。古歌が多い。今はそれとも不分明に過ぎて了つた。

琵琶の湖水が又この邊から青く並木の間に浮む。涼しい風が吹く、藍碧の空、紺青の山、水は天の如く、天は水の如き大觀もある。又小波よする蘆荻の間に比叡の姿を寫し、藻の靡く形も小魚の宿も覗ける美しい小觀もある。湖が非常に小さくなるにつれて名所を渚に集め、月によく、雨によく、風にもよい眺は灣又灣、青い蘆荻つゞきにある。近江八景については別に稿を起したい。

湖の水が宇治に落ちるところに瀨田橋がある。渡れば自分も八景中の人である。左の森が石山

寺、松の間を通ればそれが粟津が原であつた。膳所の先、大篠の馬名に義仲寺がある。義仲の骸は永久に眠り、徳音院義山大居士の塚の傍に信濃柿二本植ゑたはせめて故郷を偲ぶ標である。

木曾殿と背中合せの寒さかな　芭蕉

と、「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」翁のなきがらも門人其角等に送られて、

なきがらを笠に隠すや枯尾花　其角

あゝ、とうとう木曾路以來の旅の道づれであつた二人の古人は不思議にも背合せに默々と眠つてゐる。湖上の月を後に名にしおふ逢坂山を越ゆれば京に三里、中山道も盡きる。(枚方の朝、雨と風の響をききつゝ。)

第十九日。行程九里、(八幡大津間)計百五十六里半。旅費一圓三十四錢。内譯、晝飯三十錢、卵七錢、サイザー十二錢、切手十五錢、宿七十錢。

近江八景

風わたるにほの水海そらはれて　月かげきよし神津しまやま　(續千載)

湖光一片、小波ひかる湖のほとり魚善の廣椽には波の音がよせてゐる。滋賀日出の粟津氏、水泉堂の池上氏と湖水でとれた魚づくし、今宵の月を看に湖南の勝景を談るとき、千鳥の聲は遠く近く、

淡海の海ゆふ波千鳥なかなけば　心もしぬに古おもほゆ　(萬葉)

古憶ふ、古思ふ。渚に蘆荻のそよぎ、松の影うつす灣又灣、入江漕ぎ出る舟につれて近江八景は眼前に展開せられた。琵琶の海は四山の水を注いで不增不減の湖をたゝへし無双の巨浸である。孝靈天皇五年、一夜地裂、湖出來、駿河國富士山湧出する傳説と共に淡海のみ浪立つ昔から古い。明應の頃近衛關白が選んだ八景は、

比良暮雪。霰ふる近江路ならば雪を載いて見えもせうもの。夏の旅には天碧く、地青く、山も蒼い。二十日路の背に立つ雲の峰より高く、湖水にうつる影は湖の畔を過ぐるとき唯一の目じる

しであつた。

瀬田夕照。大橋小橋を渡るとき高欄に寄り、古びた賽珠を撫りつゝ幾人の歌人俳人を佇立せしめたのかと、そゞろ偲ばれた。渚の柳のかげに白塗の瀉船が動き、汽笛に驚くは蘆の中にすむ水鳥ばかりでない。見れば夕映雲はゆら〳〵と波に乘つてゐる。石山の森は黑い。

石山秋月。八葉の岩に奇雲下り、紫雲常に鬱鬱たりし天平勝寶の頃は知らぬ。今は樓門の下に藝者の寫眞を列べて賣り、京阪遊覽の境となつてからは月も照らぬ。嘘と知りながら(源氏評釋源氏の間を一覽したいと言へば、一人ではと澁る。この坊主も慾がある。一人の案内料は僅に三錢であるから。

粟津晴嵐。並木の松に問ひたいのは駒乘り入れて深田にはまり、眉間の箭傷に觀念の目をつむつた旭將軍義仲の軍容である。松の風ふく草の上、蟲の音きゝに蓙ひき被り、夏の夜はこゝに明すにはよい蟲の聲々。畫みては餘りに淋しい眺である。

矢橋歸帆。昔は渡しがあつて、大津から櫓の音高く乘り切つたところである。今は名のみ八景に入りながら訪ふ人もなく埋れた不遇の一景。たゞ比叡から遙に指顧の間に見えたときだけは又

八景の一にかへる。

三井晩鐘。燭つぎたして書かば水を度る鐘の音も聞えやうものを。大津のとまりの月がよかつたので、いつか鐘の音に夜は更け渡つたまゝ。

翁

三井寺の門たゝかばやけふの月

芭蕉の翁が居たら二人湖水を渡る寒風に風流の道を月下に辿らうものを。

唐崎夜雨。「からさきの松は花よりおぼろにて」(芭蕉)「かすかに見ゆる眞砂地にまがふ色なき一本松」と唐崎の松は遠くから見るものである。比叡は背景に是非なければならぬ。渚の蘆を白帆と藻苅舟も缺いではならぬ景色の一つ。こゝで不思議に思つたのは藻苅舟に上る藻につく砂は眞白であつたこと。琵琶湖の底は泥でなかつた。水鳥が渚に鳴いてゐる。

堅田落雁。から槽こぐ鳥の音は遂に聞かず。水にうつるかげも無い。たゞ鎖あけて月さし入よ浮御堂」と舟で行きたかつたが琵琶湖は夜舟が出ぬ。こゝばかりは見落して了つた。湖上にうかぶ鷗の夢驚かして訪ふつもりだつたのに。(さあ此から比叡へ。)

八景は水上から皆見渡すべきものである。湖南の勝景今なほ朧ろに筆とれば浮ぶ。あの青波に

浮んで。(十七日夜、大阪萬伸舍二階にて。植松、岩島、島田氏につれられ下山君と共に大阪見物をなし歸りて後。)

比叡山

湖が振返るとだんだん遠くなるにつれて蟬の聲と水の響が高くなる。まだ旅衣に湖の風の匂がとれぬ中に、比叡おろしは青葉の風を袖に送る。昨日近江路を暑さにあえぎながら急ぐとき、遙か雲霄の間に突兀として聳えた比叡の峻坂に、今日は京の人と道づれとなつて立つてゐる。

坂本から登る道は恐ろしい坂である。蟲々と老檜古杉の木立がそびえた間を一文字に道は登る。木の間を透して日の光は路の上に踊つてゐる。美しい蝶が舞ひ、笹の葉が鳴る。たゞ残念なのは比叡には草花が無いことである。

かなめの宿は麓から根本中堂までは二十五町と聞いたその間の木蔭涼しい杉木立である。美しい岩清水が湧く、その冷い響を聞く毎に掬つた。一度見えなくなつた湖は再び現れ、三度姿を木の間に現はす。一度は一度毎に景を增し、趣を添へた。中にも唐崎の松は要で、浮ぶ舟は墨繪に見る要の宿の眺は暫く足を留めさせた。湖光一碧、白帆が浮ぶ長い尾を引いた汽船が横ぎる。

根本中堂の上に出たとき山の高いことを感じた。薄い雲が杉の木立を煙るやうに過ぎる。宿坊が見え、頂の廣場には茶屋もある。厚い木影の間に薄黑く山の緣にくんじて立つ金山の根本たるこの大伽藍の前に立つと、冷い風が闇い廊下の下から吹いて來る。青苔の匂がプンと鼻をついて靜寂と言ふ氣持が泌々と迫つて來る。千年のさびをこめて舞ひ上る內陣の塵、微かな燈をたよりに藥師像を安置してある奥を見ると格子の間から重い大伽藍の中の動かぬ空氣がスーッと流れ出て顏に當る。この中堂を出れば鐘樓堂がある。戒壇堂、文殊樓も見た。

大講堂には傳敎以來消えぬ燈が一ッ光つてゐる。杉の影が庭に、階にうつり、梢が壁にまで染つてゐた。こゝで思ひ出したのが、いざ何事と言へば一山數千の山法師が長刀突き突き集つたことである。今立つてゐるところも昔は何とか言ふ荒法師が長廣舌を振つたところかもしれぬ。鴨川の水を見るのも近い旅には用ない双六は知らぬ。この荒法師が神輿かついで走り越えたと言ふ雲母越がして見たくなつた。

小笹に交つて石竹が咲く笹山を、蟋蟀の聲を止めさせ將門岩まで驅け上つた。玆は四明岳の絶頂である。琵琶湖は煙り、一岬一灣靈山の翠とけ、點々と島も數へられる。

山又山は眼下に波瀾の如く、平安城は夕日に瓦甍粉碧輝く間を鴨川がうねりうねり流れてゆく。伏見が見える。淀が霞む。男山八幡の丘が指さされる。經も聞えぬ、梵唄も絶える、眞にこの大觀に接して胸中何ものか與るのは將門一人では無い。

鴨川原の夕

白河越へ引かへして山頂を又驅け下り、辨慶水をのみ、傍目もふらずに京の方へ。湖が見える、又隱れる。谷を廻る、山角を飛び越す、鳥が驚いて飛び立つ。走り走つて京都の入口出町橋についた時はもう薄暗かつた。樂隊が始る。萬歳の聲が湧く、友人の顏がちらつく……京の町には燈が見える。

鴨川原の夕べ、東山は黑く星の流れる晩驩迎の宴は開かれた。東枝氏の開會の辭、植松氏の挨拶がすんで酒杯に星を浮せて廻はす。夜の鴨川の水に赤い燈が映り、石を洗ふ水潮の響き一つ一つに蛙の聲を添へ、京の夜は靜に更ける。

四條の橋を燈が走つて渡つた。五條の橋に電燈が光つて水に映る。この中間の河原に雪洞をと
け純京都式に棧敷が水に突出してゐる。東山が微に明くなる頃、誰が流したか西瓜の舟がユラユ
ラと水を流れて來た。折から鈴の音か蟲の聲か、爽かな響が頭の上にする。一座の人は皆耳を傾
けると、長い竿の尖に小さい籠が下つたのがヌツと欄干を越して止つた。中には青葡萄の一房、
京都の島田氏の手に受け取られた。京の川に商するも風流である。一座は益々興に入つた。

月は東山を離れる。川も橋も兩岸の家も浮出すやうに光を浴び、風流な葡萄賣る舟は水竿をカラリと舷になげた。その音がこの靜けさを破つて響いたばかり。

第二十日。行程凡四里位（比叡越）計百六十里半。旅費四十二錢五里。內譯、湖南回遊乘船券二十五錢、辨慶力餅十五錢、草鞋二錢五厘。

嵐山

碧い水に足を浸けて田中秀夫君はバチャバチャ言はせて默つてゐる。僕も石垣に腰かけ水の流をヂッと熟視めて居た。凉しい蟬の聲が丁度水の底から聞えるやうに思へる。嵐山の下、桂川に沿うて二人はのぼつた。道々奈良や京都の建築についていろいろ田中君は談つた。名も知れぬ草花を摘んで二人がここに腰かけたとき、本郷の下宿で隣の部屋同志で、よく話した嵐山に偶然にも袖を列ねて遊べたのも不思議である。あゝ今度の旅行には全く出る日から終の日まで友達と許り歩いた。

桂川の水が堰かれて淵を湛へ、兩峽の松の色は仰いでも伏しても見える。何れが影とも姿ともわからぬ。溯るに從つて瀨となり、岩が現れ、淙々のひゞきに凉しさが漲る。千鳥ヶ淵の藍をたゝえたところに來ると、こゝからは綺麗に着飾つた京女の日傘が渡月橋を渡るのは、もう見えぬ。田中君と二人で旅のことを話し合つてブラブラ行くと氣も心もゆつくりして、二人で大學の池をいつものやうに夕方散歩してゐるやうである。けふは大阪に向つて立たねばならぬのも忘れて嵐峽亭の一室に、松の葉吹きこむ山風に吹かれ、大の字に寢ころんだとき程長閑な感をしたことは無い。水が岩の間を流れる上を續々と保津川下りの遊び船が通る。ゴーッと言ふ響に驚いて片肘立てると、前岸を汽車が黑い煙を吐いて隧道に入つた。

楊柳歌

やなぎの歌に別れを惜しむには、ふさはしい京の雨である。島田氏には血緣も及ばぬ面倒を見て貰ひ、伏見街道まで送られ、それから先は稻山君がこの俄雨に下駄は脫ぎ尻端折つて送つて來る。稻荷の祠の樓門が松の翠の間に雨にスッカリ洗はれて鮮かに立つてゐた。伏見では東枝氏につれられ寺田屋の碑を弔ふ。昔は三十石船の着いた岸に今もなほ偲べば柳の絲が水に垂れ、すれずれに水煙にかすむ。雨はハラハラと注いでやまぬ。

淀川づたひに夕暮を急ぐと蘆荻なびき、草靑い土手の川柳のかげに水車がクルクルと川瀨に廻

つてゐる。蒸氣船が上つて來るのは大阪から來たのかと旅の終りが目にちらついた。

八幡で日がくれた。燈火の光と花火の空に五彩に散る光を後にする頃は日もトップリ暮れて、雨はショボショボ降つて來た。今夜宿る枚方(ひらかた)まで三里ある。京阪電車が淋しい響を殘して走る度に夜は更ける。

土手の上を行くと蟲の聲々。草ずれの響を聞きながら眞闇の堤を急ぐのは海の底でも行く旅の心持がする。遠くに燈火が一つ二つ、又一團と淋しく光る。ハラハラと冷い雨が頰をうつた。

第二十一日京都滯在。

第二十二日。行程七里、(京都枚方間)計百六十七里。旅費一圓十二錢。內譯、嵐山繪ハガキ四組四十八錢、嵐峽亭茶代十錢、氷九錢、電報二通四十五錢。

大阪の煤煙

牧方のとまりは穢い布團、拙いもの許りである。小さいランプの下で遲れた通信文を書きながら、外の風や雨に折々ペンを止めて聞耳たてる。雨滴が軒を廻つて敷石の上に瀧の如くあふれてゐる。

翌朝は雨はやんだが、慘しい暴風は又來た。今日も淀川づたひにひた下りに下る。川には逆波だつて濁流が渦き流れ、空には雲が低く狂ひ狂つて頭上を走る。眞正面から吹きつける烈風には殆ど脚も前に出ず、息もつまるかと思ふた。第三回の暴風雨は又も疲れた旅の子を廻つて吹荒れてゐる。

幾度かの驟雨に又も着物は濡れ、傘は折れ、一枚の油紙を被りスタスタと脚もと許り見てゆく姿を遠くから見れば、秋の暮れ野分に衣ふかれ鉦たゝきながら修行に出た旅僧の樣にも見えたであらう。

大阪の煤煙が遙かに見えた頃、風はやみ、雨は霽れ、雲間からは日の光が雨後の水溜に照つて來た。あゝ玉造口、玉造口。東京を出でゝ二十三日。再び下山君と堅い握手を交した。(植松、岩島、島田三氏につれられ昨日は下山君と共に濱寺の海水浴にゆきて雨に濡れ、夕は丸萬に大阪趣味を味つた。夜植松氏と下山君を東京に送る。僕は今から藍碧の天、青松白砂の九州小倉へ向つ

て歸省の途につく前この最後の通信文を記す。明治四十四年八月十九日午前十一時。萬伸舍階上にて。）

第二十三日。行程六里、（枚方玉造間）計百七十三里半。旅費一圓八錢。內譯、枚方泊七十錢、草鞋三錢、油紙二十錢、密柑と菓子十五錢。

かけりゆく心 終

大正十一年四月十五日印刷
大正十一年四月廿五日發行

定價金壹圓五拾錢

かけりゆく心

著作者 石原雅二郎
東京市牛込區矢來町四番地
發行者 小池則之
東京市下谷西黑門町廿番地
印刷者 大森小象
發行所 法制時報社

博秀社印行

發賣所
東京市牛込區矢來町四番地
電話番町 一〇五五番 四三一六番
振替東京 二六三七〇番
南郊社

394
199

終